

心理療法における“Identified Resistance”に関する研究 (I)

三 谷 聖 也 (愛知教育大学教育臨床学講座)

A study on “Identified Resistance” in psychotherapy (I)

Seiya MITANI (Department of Clinical, psychological and Practical Studies in School Education, Aichi University of Education)

要約 本論は、「抵抗」とその概念構成者に関するコミュニケーション研究である。心理療法における抵抗とはS・フロイト(1926)によって提唱された概念であり「回復の作業に対抗するすべての力」と定義される。「抵抗」に関する見解は多様に存在し、その発生をクライアント(以下CI)に帰属するものからセラピスト(以下Th)自身に帰属するものまで多岐にわたる。その価値づけに関しても「抵抗」を治療の妨げと見なす立場から協力の方法と見なす立場まで様々である。このように心理療法における「抵抗」については、見解の一致がみられていない現状がある。そこで本研究では「Identified Resistance」(三谷, 2009)というメタ・レベルの概念を用いて、抵抗と見なされてきたものを対象にコミュニケーション分析を試みた。具体的にはThはいかにして「CIが抵抗している」という現実を構成しているのかについてコミュニケーションの観点から検討がなされた。加えて、「Thによって抵抗と見なされたもの」と「CIによって抵抗と見なされたもの」との異同が検討された。結果として、「CIがより抵抗している」とThが見なしている場面では、Th自身が会話に積極的になっていること、そしてCIが比較的曖昧なコミュニケーションと考えられる「長母音間投詞」をより多く使用していることが示された。一方、CIがより抵抗感を感じている場面では、CIは合意形成や対人距離に関する「終助詞“ね”」をより多く使用する傾向にあることが示された。これらの結果より、「Thによって抵抗と見なされたもの」と、「CIによって抵抗と見なされたもの」とが異なる可能性が示唆された。この結果は、「抵抗をもっぱら患者の心的内界プロセスのみに由来するものとして解釈することはできない」と主張したR・ストロロウ(1987)の見解を支持するものと言え、抵抗を一定の観察位置から一義的に捉えるのではなく間主観的に捉えていくことの臨床的意義が示された。最後に臨床的示唆として、「CIが抵抗している」とThが見なしているときこそTh自身の行動を振り返ることの有効性が示された。

Keywords : Identified Resistance, コミュニケーション分析, 間主観

I 問題

心理療法の歴史を見てみると「抵抗」に関する見解は多様に存在していることがうかがえる。まず本論では抵抗概念の誕生とその変遷、抵抗へのアプローチの展開をたどることにする。「抵抗」とは精神分析の祖であるS・フロイト(1916-1917)によって、無意識の意識化を妨げるものとして提唱された概念である。フロイトは当初は、抵抗を分析治療の妨げとして捉えてきた。しかしながら次第に抵抗分析こそが分析治療の要であると考えようになってきた。S・フロイトの弟子のW・ライヒ(1933)は抵抗分析を発展させ、技法論の立場から抵抗の内容分析ではなく、形式分析の有効性を主張した。新フロイト派のK・ホーナ(1942)は、抵抗を現状維持の願望と見なし、抵抗を治療者側からではなく患者側から観察しようと試み、神経症からの回復に抵抗するのはもっともなことであり自己の一部として尊敬せよと主張した。同じく新フロイト派のF・フロムライヒマン(1950, 1959)は、患者の非言語表現も含めた全体を患者のことばと見なすことを主張し、従来抵抗と見なされてきた「沈黙」に新たな意味を見出した。新フロイト派の考え方は後の家

族療法にも引き継がれ、抵抗の利用化や非言語的アプローチとして展開する。クライアント中心療法のC・ロジャース(1966)は、CIの示す抵抗を認め受容するアプローチを展開するとともに、抵抗の発生をCIに帰属するのではなく、Thの技術の未熟さにあると主張した。家族療法から派生した解決志向短期療法のS・ド・シューザー(1980, 1984)はThが抵抗と見なしたものはCIのユニークな協力のサインであるという見解を示した。これに対し家族療法家のC・アンダーソンとS・スチュワート(1983)は異論を唱え、抵抗のラベルを協力のラベルに張り替えたにすぎないと指摘し、現象としての抵抗を扱うべきという実用論を展開した。

このように抵抗概念の歴史を概観してきたが、抵抗に関する見解やそのアプローチは多岐にわたり、見解の一致がみられていないと言える。その理由は、H・コフト(1984)の指摘のように、セラピーにおける何らかやり取りを、抵抗と見なすか否か、またどのように価値づけするかは観察者の視点の相違に基づくものだと考えられる。観察者の視点を抜きにして、抵抗について議論することは意味をなさず、抵抗であると見なした観察者をも含めて検討していく姿勢こそが不

可欠であると言えるだろう。

そこで本研究では「Identified Resistance（抵抗と見なされたもの）」（三谷, 2009）というメタ・レベルの概念を用いて「抵抗」を実証的に捉え直す試みを行なっていく。ここでは、抵抗と見なされたCIが示す諸行動だけでなく、観察者であるThの行動とその現実構成の過程をも分析対象としたコミュニケーション分析を行なう。

II 目的

目的1：「Thによって抵抗と見なされたもの」と「CIによって抵抗と見なされたもの」は、ThとCIとのやり取りにおける、いかなる観察可能な行動に関連して「構成」されているのかを検討する。

目的2：同一話題に対して「Thによって抵抗と見なされたもの」の度合いと「CIによって抵抗と見なされたもの」の度合いは、どのような相関関係にあるのかを検討する。

III 方法

被験者

28組56名。A大学・大学院の学生1人に知人を1人連れてくるように指示し、2人1組で実験に参加してもらった。被験者のいずれかは臨床心理学を学び心理臨床の実習を行っている者、あるいは実際に臨床家として勤務をしている者たちである。その理由はどちらか一方に疑似面接場面におけるThを依頼するためである。

独立変数

抵抗測定質問紙R（セラピスト版）得点に基づく高群と低群。抵抗測定質問紙R（クライアント版）得点に基づく高群と低群。尚、上記の群分けは各得点の中央値に基づき行われた。

従属変数

抵抗測定質問紙R（セラピスト版）得点、抵抗測定質問紙R（クライアント版）得点、反応を示すうなずき（Th/CI）、反応を求める頭の動き（Th/CI）、脱文脈反応（Th/CI）、終助詞“ね”（Th/CI）、終助詞“よ”（Th/CI）、間投詞（Th/CI）、沈黙、話者交替。

話題の選定

<抵抗話題>

抵抗場面で話される話題の選定はCIに以下の条件を提示して任意に行なわれた。話題のテーマはJ・ヘイリー（1963）によって示された、1）その程度がひどく通常のレベルから外れているようなもの、2）それをしてしまうのはそうせざるを得ないからであって

自分が望んだからではない、という2つの要件を満たすものとした。本研究で実際に扱われた話題内容について例をあげると、「完璧主義になりがち」「ネガティブ思考」「人前で緊張してしまう」「Eメールの返信が遅い」「朝起きられない」「片づけられない」「意見が言えない」「遅刻の癖」などであった。

<雑談話題>

話題として取り上げることに差し障りのないレベルの日常会話とした。被験者はこの雑談話題には選定した抵抗話題を含めないようにと指示をしている。

質問紙の構成

本研究で使用される質問紙は「抵抗測定質問紙R（クライアント版）」（5件法）と「抵抗測定質問紙R（セラピスト版）」（5件法）の2種類である。これらの質問紙は、構成的グループ・エンカウンターにおける抵抗を測定するために開発された片野・国分（1999）の「抵抗測定質問紙」の質問項目を、疑似セラピー場面という実験場面に適合するように、質問文に変更を加えて作成された。尚、「抵抗測定質問紙R（セラピスト版）」については、質問文の主語の変更がなされている。主な変更点として、「私は〇〇である」→「相手は、〇〇と感じているようだった」という変更である。対応表は以下の通りである。

Table 1 質問文変更対応例

抵抗測定質問紙（片野・国分, 1999）	エクササイズをしているとき私ははずかしかった
抵抗測定質問紙R（クライアント版）	会話をしているとき、私ははずかしかった
抵抗測定質問紙R（セラピスト版）	相手は会話をしているとき、はずかしいと感じているようだった

各質問紙について抵抗測定質問紙（片野・国分, 1999）と同様の22項目についてCronbachの α 係数を算出したところ、抵抗測定質問紙R（クライアント版）で0.80、抵抗測定質問紙R（セラピスト版）で0.86であり、いずれも高い信頼性が確認された。

実験道具

DVDハンディカム、ハンディカム固定用三脚、椅子4脚（VTRに表情が映る範囲でそれぞれカメラ方向に角度つけるが、被験者はほぼ対面する形で座る）、テーブル1台（質問紙記入用）。尚、撮影に際しては、撮影されたデータは実験以外の目的に使用しない旨を明記した承諾書への記入を求めているから実験を開始した。

実験手続き

実験手続きはFigure 1の通りである。実験につい

での説明後、実験への同意書および実験場面の撮影への同意書への記入が行われた。その後、臨床経験／実習経験がある方の被験者を Th として、CI には実験場面で話すことのできる問題（抵抗話題）の選定が指示された。これは所定の用紙に記入され、抵抗話題開始前に Th に提示された。その理由は、相談時間が10分間と限られているため、セラピー冒頭の主訴の説明の時間を短縮化するためである。セラピー開始前に、雑談場面が挿入された。これは実験場面に慣れるため（セラピー場面ではラポール形成やジョイニングの段階に当たる）、および操作チェックとして使用するためである。雑談話題では条件統制のため予め選定された抵抗話題を話すことは禁止された。雑談話題後に質問紙への記入が求められた。その後、被験者は抵抗話題についての会話をするのが指示され、会話終了後に同様の質問紙への記入が求められた。



Figure 1 実験手続き

尚、実験終了後に被験者両者の関係にネガティブな影響が出てくることのないように、実験終了後に抵抗に関する研究であったことの主旨説明を行った。また抵抗話題を話すことによって心理的混乱を来してしまう被験者への配慮として、実験後のアフターセッションの希望を募ったが、本研究では申し出るものはいなかった。

行動指標と判定基準

以下に示す8つの行動指標は、「人間コミュニケーションの語用論」(Watzlawick, P. et al., 1967) に端を発する一連の語用論研究で用いられてきた行動指標である。

1. 反応を示すうなずき

若島(2000)、奥野(2009)を参考に、「相手が発話している最中や発話を終えた直後などに首を縦に振るもの。はっきりと正常位置から下を向きすぐにもとの位置にもどすもののみで、下を向いてから上を向くまでの間に時間が経過するものは含まない。一度に2回以上連続して振っても1回と見なす」と定義した。

2. 反応を求める頭の動き

若島(2000)を参考に、「話し手が発話したフレーズの最後で行う、相手の反応を求めていると見なせる頭の動き」と定義した。

3. 脱文脈反応

脱文脈反応とは若島(2000)のいうディスクオリフィケーションと同義のもので、三谷(2005)では以下の8つの特徴を判定基準としている。尚、ここでいう脱文脈反応には、言語的反応で意味内容の伝達の有するものを対象としている。①誰の意見か不明確にする、②誰に対して述べられているのかを不明確にする、③相手の意見を肯定しているのか否定しているのか不明確にする、④相手の意見に対して肯定と否定の両方を明確に示す、⑤会話自体を回避する、⑥話されている内容と話している文脈を混乱させる、⑦概念を過度に一般化したり過剰に制限する、⑧話されている内容と違う内容について話す。

4. 終助詞“ね”

奥野(2009)に基づき、発話の最後に発せられる“ね”であり、発話はポーズによって区切られていることを基準とした。

5. 終助詞“よ”

奥野(2009)に基づき、発話の最後に発せられる“よ”であり、発話はポーズによって区切られていることを基準とした。

6. 沈黙

菅原(2004)を参考に2秒以上の無音状態を沈黙1回とカウントする。次の話者が発話するまでの間、無音状態が何秒続いても1回とカウントする。無意味語の有音状態は含まないものとする。ストップウォッチにて2秒超過しているかどうかを判定。

7. 間投詞

菅原(2004)にならぬ、短母音や拗音を含むものではなく、長母音を含んでいる無意味発話とする。指示代名詞は除く。尚、国語学的定義に基づくならば間投詞は感動詞と同義で扱われ、ここには「あいづち」も含まれている。

「えー」「えーと」「あー」「あー」「まー」「んー／うーん」「そのー」「こー」「あーと」「んーと」「はー」「ふーん」「へー」「そー」

8. 話者交替

メイナード(1993)、花田(2003)、奥野(2009)を参考に「発話順番を取ること。その会話の単位に意味や機能があり、発話の順番を取るものが誰かを両者とも認めており、聞き手は聞き手の役目を引き受けている」を基準とした。この際、話し手の発話中になされた聞き手のあいづちによる話者の移動は、話者交替とは見なさない。

コーディングについて

まず各被験者に対して録画されたVTRを観察し、

抵抗話題の会話が開始されて2分後からの2分間の逐語録表を作成した。その後、VTRを観察しながら各指標の生起について逐語録表に記入していった。

一致率について

J・バーベラス(1994)の主張する客観性は相互主観的合意にすぎないという立場に基づき、一致率の算出によってデータの信頼性の確認を行うものとした。無作為に抽出された1組の逐語録表について独立した2人の判定者がコーディングを行い、一致率の算出を行った。各指標の一致率は以下の通りである。ここでは沈黙は無音状態の計時によって客観的計測が可能ということで一致率の算出からは除外した。下記の結果より、いずれも概ね高い一致率が得られたのでその後は1人の判定者によってコーディングが行われた。一致率の算出方法は、一致率 = [(一致数) / (一致数 + 不一致数)] × 100であった。

うなずき：85.7%

反応を求める頭の動き：80.0%

脱文脈反応：77.8%

終助詞“ね”“よ”：100%

長母音間投詞：92.1%

話者交替：100%

妥当性の検討

会話終了後にThに以下の定義文を読ませ、伝統的定義による「心理療法における抵抗」が生じていたかの確認を行う。抵抗の定義文は以下の通りである。

「抵抗」とは、S・フロイトが提唱した概念であり「精神分析療法の期間において、無意識への到達を妨げるような、被分析者自身のすべての言動」(Laplanche & Pontalis, 1976)と定義される。また精神分析療法に限らず抵抗とはカウンセリングの領域では広く見られる現象であるため、上記に加え「カウンセラーとクライアント(来談者)の関係のなかで共有されている課題や問題への対応法や方向性に反するような言動を、クライアントがとる」(鷲岳, 2008)ことと定義される。

IV 結果

分析対象は、実験に参加した全被験者のうちVTRデータに不備がありコーディングが困難であった2組を除く26組52名であった。

操作チェック

まず操作チェックとして「抵抗測定質問紙R(セラピスト版)」得点および「抵抗測定質問紙R(クライア

ント版)」得点それぞれについて、雑談場面と抵抗場面との得点の比較を行った。結果はTable 2に示したとおりである。これより「抵抗測定質問紙R(セラピスト版)」得点の平均値は、雑談場面では38.69(SD=53.50)、抵抗場面では46.69(SD=58.70)であることが示された。これらについて対応のあるt検定を行ったところ有意な差がみられた($t(25)=5.00, P<.05$)。また「抵抗測定質問紙R(クライアント版)」得点の平均値は、抵抗場面では37.96(SD=43.88)、雑談場面では42.88(SD=52.83)という値であった。結果はTable 3の通りである。これらについて同様に対応のあるt検定を行った。その結果、有意な差がみられた($t(25)=4.64, P<.05$)。これらの結果より、ThおよびClにとって抵抗場面が雑談場面と比較して相対的に抵抗の高い場面であるという前提が確認された。

Table 2 抵抗測定質問紙R(セラピスト版)得点の記述統計

	M	S D	t 値(片側)
雑談場面	38.69	53.50	
抵抗場面	46.69	58.70	5.00 ***

† $p<.10$, * $p<.05$, ** $P<.01$, *** $p<.001$

Table 3 抵抗測定質問紙R(クライアント版)得点の記述統計

	M	S D	t 値(片側)
雑談場面	37.96	43.88	
抵抗場面	42.88	52.83	4.64 ***

† $p<.10$, * $p<.05$, ** $P<.01$, *** $p<.001$

妥当性チェック

続いて実験場面において伝統的定義による「心理療法における抵抗」が生じていたか否かを以下の手続きで確認した。会話終了後にThのみに下記の抵抗の定義文を読ませ、記述された内容が会話中に認められたか否かが尋ねられた。その結果、「認められなかった」と答えた被験者はいなかったため「心理療法における抵抗」がこの実験場面で生じていたことが確認された。

抵抗測定質問紙R(セラピスト版)得点高低の比較

「抵抗測定質問紙R(セラピスト版)」得点に基づき群分けされた「低群」と「高群」の各指標について等分散を仮定した2標本のt検定(両側検定)を行った。結果はTable 4のとおりである。

はじめにThの行動指標についてみてみると、「高群」において「Thうなずき」が有意に多く($t(24)=2.50, P<.05$)、「Th反応を求める頭の動き」が有意に少ない($t(24)=-3.99, P<.05$)ことが示された。その他のThの行動指標(Th脱文脈反応, Th終助詞“ね”, Th終助詞“よ”, Th長母音間投詞)については、有意な差はみられなかった。

次にClの行動指標についてみてみると、「高群」において「Cl長母音あいづち」の使用が有意に多いことが示された($t(24)=-3.60, P<.05$)。その他のClの行

動指標 (抵抗測定質問紙R (クライアント版) 得点, CI うなずき, CI 反応を求める頭の動き, CI 脱文脈反応, CI 終助詞“ね”, CI 終助詞“よ”) については有意な差はみられなかった。

最後に会話スタイルの指標についてみると、「高群」において「話者交替」が有意に多く生起していることが示された ($t(24) = -2.90, P < .05$)。「沈黙」については有意な差はみられなかった。

抵抗測定質問紙R (クライアント版) 得点高低の比較

続いて「抵抗測定質問紙R (セラピスト版)」得点に基づき群分けされた「低群」と「高群」の各指標について等分散を仮定した2標本のt検定 (両側検定) を行った。結果はTable 5のとおりである。

はじめにTh行動指標についてみると、いずれの指標 (抵抗測定質問紙R (セラピスト版) 得点, Th うなずき, Th 反応を求める頭の動き, Th 脱文脈反応, Th 終助詞“ね”, Th 終助詞“よ”, Th 長母音間投詞) にも有意な差は見られなかった。

次にCIの行動指標についてみると、「高群」において「CI終助詞“ね”」の使用が有意に多いことが示された ($t(24) = -2.79, P < .05$)。

最後に会話スタイルの指標についてみると、「沈黙」「話者交替」いずれの指標にも有意な差はみられなかった。

Table 4 抵抗測定質問紙R (セラピスト版) 得点の高低と各指標の平均値と標準偏差

		M	SD	t 値(両側)
Th うなずき (回数)	低群	23.46	44.10	2.50 *
	高群	17.08	40.91	
Th 反応を頭の動き (回数)	低群	4.31	9.40	-3.99 ***
	高群	9.23	10.36	
Th 脱文脈反応 (回数)	低群	0.15	0.14	-0.93 n.s.
	高群	0.46	1.27	
Th 終助詞“ね” (回数)	低群	0.77	1.53	-1.49 n.s.
	高群	1.54	1.94	
Th 終助詞“よ” (回数)	低群	0.23	0.36	-0.57 n.s.
	高群	0.38	0.59	
Th 長母音間投詞 (回数)	低群	15.15	50.47	0.00 n.s.
	高群	15.15	26.81	
抵抗測定質問紙R (CI版) 得点	低群	41.46	45.60	-1.00 n.s.
	高群	44.31	60.06	
CI うなずき (回数)	低群	7.46	24.94	-0.98 n.s.
	高群	9.23	17.53	
Th 反応を頭の動き (回数)	低群	12.46	35.10	0.57 n.s.
	高群	11.31	18.56	
CI 脱文脈反応 (回数)	低群	0.08	0.08	-1.68 n.s.
	高群	0.46	0.60	
Th 終助詞“ね” (回数)	低群	2.31	4.23	-0.31 n.s.
	高群	2.54	2.77	
Th 終助詞“よ” (回数)	低群	0.46	0.44	-1.10 n.s.
	高群	0.85	1.14	
CI 長母音間投詞 (回数)	低群	4.00	4.33	-3.60 **
	高群	7.85	10.47	
沈黙 (回数)	低群	0.23	0.36	-0.85 n.s.
	高群	0.46	0.60	
話者交代 (回数)	低群	4.62	9.42	-2.90 **
	高群	8.77	17.19	

†p<.10, *p<.05, **P<.01, ***p<.001

Table 5 抵抗測定質問紙R (クライアント版) 得点の高低と各指標の平均値と標準偏差

		M	SD	t 値(両側)
抵抗測定質問紙R (Th版) 得点	低群	46.92	85.08	0.15 n.s.
	高群	46.46	37.10	
Th うなずき (回数)	低群	20.08	44.08	-0.13 n.s.
	高群	20.46	62.94	
Th 反応を頭の動き (回数)	低群	5.92	15.24	-1.09 n.s.
	高群	7.62	16.09	
Th 脱文脈反応 (回数)	低群	0.15	0.14	-0.93 n.s.
	高群	0.46	1.27	
Th 終助詞“ね” (回数)	低群	1.31	2.73	0.57 n.s.
	高群	1.00	1.00	
Th 終助詞“よ” (回数)	低群	0.36	0.55	0.39 n.s.
	高群	0.25	0.39	
Th 長母音間投詞 (回数)	低群	14.69	43.06	-0.38 n.s.
	高群	15.62	33.76	
CI うなずき (回数)	低群	8.46	26.10	0.13 n.s.
	高群	8.23	18.03	
CI 反応を頭の動き (回数)	低群	11.92	24.24	0.04 n.s.
	高群	11.85	30.14	
CI 脱文脈反応 (回数)	低群	0.23	0.19	-0.32 n.s.
	高群	0.31	0.56	
CI 終助詞“ね” (回数)	低群	1.54	2.10	-2.76 *
	高群	3.31	3.23	
CI 終助詞“よ” (回数)	低群	0.62	0.59	-0.22 n.s.
	高群	0.69	1.06	
CI 長母音間投詞 (回数)	低群	5.46	8.77	-0.70 n.s.
	高群	6.38	13.59	
沈黙 (回数)	低群	0.38	0.59	0.28 n.s.
	高群	0.31	0.40	
話者交代 (回数)	低群	6.54	19.27	-0.19 n.s.
	高群	6.85	16.64	

†p<.10, *p<.05, **P<.01, ***p<.001

両質問紙の相関

抵抗測定質問紙R (セラピスト版) と抵抗測定質問紙R (クライアント版) は同一のセッションに対して、ThとCIがそれぞれ事後的に回答するものであったが、これら2つの質問紙得点の相関の検討を行った。

相関係数を算出したところ $r=.15$ であった。さらに有意性検定を行った結果、有意な相関は認められなかった ($F(2,24) = 0.55, n.s.$)。以上より同一セッションに対するこれら2つの質問紙得点に関して、有意な相関は認めることができなかったといえる。

V 考察

結果のまとめ

抵抗概念構成に関して各抵抗測定質問紙R得点の高群と低群の比較をおこなった。まず、Thの抵抗概念構成については、高群では低群よりも「Th うなずき」が有意に少なく、「反応を求める頭の動き」が有意に多く、「CI長母音あいづち」が有意に多く、話者交替が有意に多いという結果が示された。それ以外の行動指標については有意な差がみられなかった。一方、CIの抵抗概念構成については、高群では低群よりも「CI終助詞“ね”」の使用が有意に多いという結果が得られた。それ以外の指標については有意な差はみられなかった。これらの結果について7つの観点から考察を加える。

1. Thの抵抗概念構成に関連するCIの行動

まずThが抵抗と見なしたCIの行動について考察する。結果よりThは「CI長母音間投詞」の使用が多いと「CIが抵抗している」と見なすことが示された。これは、土居(1961)の指摘する「抵抗」は「言い淀む」「打ち明けかねている」という形で現れるという見解と合致する結果である。また菅原(2004)は、微細なコミュニケーションである「沈黙」と「間投詞」に着目した研究を行っている。そこでは、問題について話すことはお互いの関係を危くするため、それを避けるべく問題についての会話に積極的に関わらないようなコミュニケーションを取るが、その一方で何も話さない気まずさから問題に言及せず会話を維持すべく間投詞を用いるというシステム論に基づくメカニズムを解明している。これに基づき本研究の結果を考察すると、CIがThの前で自身の問題について開示することによる関係危機から回避すべく会話に消極的になるが、その一方で話さないことの気まずさから会話を維持すべく間投詞を使用したと説明可能だろう。こうしたメカニズムで生じたCIの長母音間投詞を、Thが「抵抗」だと見なしたものと推察することができる。

しかしながら「CI長母音間投詞」をいかにしてセラピストは抵抗と見なすに至ったのかについては、詳細なプロセスの検討が求められる。加えて、本研究におけるコーディングは機能の側面ではなく文法上の定義によって分類したため、「長母音間投詞」と分類されている語の中には自身の発話中に用いられたものと、他者の発話中に用いられたものが含まれている。自身の発話中に用いられているものは「言い淀み」に類するものと考えられるが、他者の発話中に用いられる間投詞は「あいづち」に類するものである可能性がある。たとえば、ThやCIからの問いかけに対して、YESかNOかを曖昧にした反応が、CIの「長母音間投詞」としてコーディングされている可能性がある。「あいづち」については心理療法場面において重要な基本となるコミュニケーションであるため、今後は「長母音間投詞」の中から「あいづち」というサブカテゴリーを抽出したより詳細な検討が求められる。

2. Thの抵抗概念構成に関連するThの行動

続いて「CIがより抵抗している」とThが見なしている場合には、Th自身はどのような行動をしているかを考察する。結果として明らかになったのは、「Thうなずき」をより少なく使用し、「Th反応を求める頭の動き」をより多く使用するということが示された。会話の内容伝達ではなく、やりとりの側面に着目したマネジメント・コミュニケーションの機能的分類の研究(秋元ら, 2002)では、「うなずき」はパッシヴ機能に、「反応を求める頭の動き」はアクティヴ機能と分類されている。これに基づくならば本研究の結果は、「CIがよ

り抵抗している」とThが見なしている場合にはThのパッシヴ機能、すなわち受動性が低下し、アクティヴ機能すなわち能動性が高まっていることが示唆される。換言すれば、ThはCIの話しをあまり聴かず、Th自身がより話す傾向にあることを示している。

これら抵抗発生のTh要因に関する結果は、抵抗研究の中では新しい知見として位置づけられるとともに、Thが抵抗という現実を構成するプロセスを検討する上で、意義があると言える。またこれは抵抗の発生をThの技術に帰属して説明を試みようとしたC・ロジャース(1966)の見解の実証的裏付けともなるだろう。

3. Thの抵抗概念構成に関する会話スタイル

話者交替に関して森岡(2005)は、「セラピーの会話は日常会話と比べて会話の順番交代は少ない」と指摘している。Thが「CIがより抵抗している」と見なす場面において、「話者交替」が多くなっているという本研究の結果は、会話場面でThが非セラピューティックなやり取りを行うことがThの抵抗概念構成に関連していることが示唆される。

4. CIの抵抗概念構成に関連するThの行動

CIがより抵抗を感じている場面のThの行動に関しては、本研究では有意な差は認められなかった。これより、CIの抵抗概念構成はThの行動や対応に基づいて行われるものとは言えないことが示唆される。

5. CIの抵抗概念構成に関連するCIの行動

続いてCIが抵抗をより強く感じている場面において、CI自身がどのような行動をとっていたかを検討する。結果は、より抵抗を強く感じている群では、CIがより多くの「終助詞“ね”」を使用するというものであった。「終助詞“ね”」については、相手にやわらかな印象を与え仲間意識や連帯感を与える働き(神尾, 1992)や、受け手の合意形成との関連(奥野, 2005)、専門性の認知や非権力スタイル(奥野, 2009)との関連が指摘されている。これより「終助詞“ね”」の使用との関連でうかがえるのは、CIの抵抗概念構成と、Thとの対人距離の持ち方や合意形成との間に関連があるということである。これについては今後詳細な検討が求められる。

6. CIの抵抗概念構成に関連する会話スタイル

CIがより抵抗を感じている場面でどのような会話スタイルを展開しているかについて、今回使用された指標に関して有意な差は認められなかった。これより、CIの抵抗概念構成には会話スタイルが関連しているとは言えないということが示唆される。

7. CIとThの認知の異同について

抵抗測定質問紙R(クライアント版)得点と抵抗測定

質問紙R (セラピスト版) 得点との相関を検討したところ、有意な相関は見られなかった。この結果より、「CIによって抵抗と見なされたもの」と「Thによって抵抗とみなされたもの」が同一ではない可能性が示唆された。以下、具体的にどのような違いがあったかを、G・ベイトソン(1971)による「情報は差異を生む差異である」という見解に基づきTh / CIにとっての「抵抗」という情報はいかなる差異によってもたらされたのかを考察する。

Thは、CIとのやり取りの中で、「CI長母音間投詞」の使用回数という「差異」に反応することに加え、Th自身の行動上の「差異」である「Thうなずき」「Th反応を求めるときの動き」、またThとCIの両者によってなされる「話者交替」回数という差異に関連して、「CIがより抵抗している」という現実を作り上げている可能性が示唆される。これより、Thは「CIがより抵抗している」と見なす際に、CIに対する外的観察の情報のみから判断するというわけではなく、会話時のThの体験にも基づいていることが示された。

「CIがより抵抗している」とThが見なしている群において、Thから見えているコミュニケーションを図示するとFigure 2の通りである。

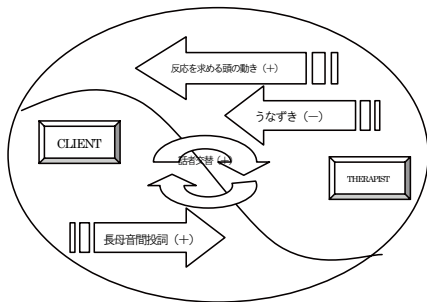


Figure2 Thによってより抵抗と見なされた場面で生じているコミュニケーション

一方、CIはThの行動要因ではなく、会話中のCI自身の行動である「終助詞“ね”」の使用、或いは本研究の行動指標の網目で掬いきることのできなかつたより細やかな差異や、古典的精神分析が対象としてきたところの精神内界で生じた差異に関連して「抵抗」という現実を作り上げている可能性が示唆される。CI自身がより抵抗していると感じる群において、CIから見える現実を図示するとFigure 3の通りである。

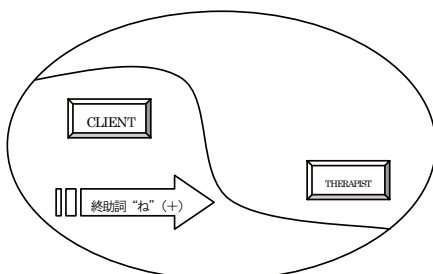


Figure3 CIによってより抵抗とみなされた場面で生じているコミュニケーション

以上のようにThとCIはそれぞれ異なるプロセスで「抵抗」という現実を構成している可能性が示された。この結果は「抵抗をもつばら患者の心的内界プロセスのみに由来するものとして解釈することはできない」とし、間主観的に捉えていく意義を主張したR・ストロウ(1987)の見解を支持するものである。これより抵抗に関して一定の観察位置から一義的な定義を行なうのではなく、間主観的に捉えていくことの臨床的意義が示されたといえる。

臨床への示唆

ThはCIの観察だけでなく、Th自身の体験と関連して「CIが抵抗している」と見なすことが示されたが、ここから導かれる臨床的示唆は、「CIが抵抗している」とThが見なしているときこそ、Thは「汝自身を振り返りなさい」である。これに加えて、Thが示す諸行動は直接、CIの抵抗概念構成とは関連があるわけではないということも示唆された。これよりCIの抵抗感の発生そのものまでをTh側のコミュニケーションに過度に帰属させる必要はないということが言える。しかしながら、ThとCIはそれぞれ別々に抵抗という現実を構成しているという結果から、セラピー中にCIの内面で生じたことにTh側の責任を求める必要はないという結論を導くのは言い過ぎである。そうではなく、ThとCIが異なる現実構成をしているという点こそ注目に値する。今後は、これらThとCIの抵抗概念構成の「差異」が、セラピーの展開や進展にどのような情報をもたらしているのかを詳細に検討していく必要があるだろう。

本研究の限界

本研究では実際のセラピー場面に近づけるべく実験場面設定を試みたが、限界もいくつかある。1つ目として、導入部分の短縮化の工夫はなされたものの、会話時間が10分という限られた時間であったことは、約1時間をワンセッションとする実際のセラピーの一部を切り取ったに過ぎないという限界である。2つ目として、本来のセラピーではCIが困った時が来談のタイミングとなるが、本研究では実験への協力を契機に主訴の話題を始めているという違いが挙げられる。

このように実験場面とセラピー場面は治療構造や来談動機に関して違いがあると言える。これらの違いを考慮しつつ臨床場面への還元を検討していく必要があるといえるだろう。

引用文献

- ・秋元健太郎・中島志保・佐藤宏平・長谷川啓三
2002 機能的側面から見たマネージメントコミュニケーションの分類の試み. 家族心理学会第19回大会

- 抄録集.
- Anderson, C.M., Stewart, S. 1983 *Mastering Resistance A practical guide of family therapy.* The Guilford Press.
 - Bateson, G. 1971 *The Cybernetics of 'Self' A Theory of Alcoholism, Psychiatry* 34.No. 1.
 - Bavelas, J. 1994 *Gestures as part of speech: Methodological implications. Research on Language and Social Interaction, Vol. 7, No. 3*
 - de Shazer, S. 1980 *The Death of Resistance.* Unpublished manuscript.
 - de Shazer, S. 1984 *The Death of Resistance. Family Process.* Vol. 23.
 - 土居健郎 1961 *精神療法と精神分析* 金子書房.
 - Freud, S. 1916-1917 *Introductory Lectures on Psycho-Analysis. Standard Edition, 15&16.* London: Hogarth Press 1963 (懸田克躬・高橋義孝訳 1971 *精神分析入門 [フロイト著作集1]*, 人文書院)
 - Freud, S. 1926b *The Question of Lay Analysis. Standard Edition, 20:* London: Hogarth Press 1959 (池田紘一訳 1984 *素人における精神分析の問題 [フロイト著作集11]*, 人文書院)
 - Fromm-Reichmann, F. 1950 *Principles of intensive psychotherapy* the University of Chicago Press 坂本健二訳 1964 *積極的心理療法* 誠信書房.
 - Fromm-Reichmann, F. 1959 *PSYCHOANALYSIS and PSYCHOTHERAPY Selected Papers of Frieda Fromm-Reichmann* The University of Chicago Press. 早坂泰次郎 訳 1963 *人間関係の病理学* 誠信書房.
 - Haly, J. 1963 *Strategie of Psychotherapy* Grune & Stratton (高石昇 1973 *心理療法の秘訣 コミュニケーション分析による発見* 黎明書房)
 - 花田里欧子 2003 *葛藤的意思決定場面における会話スタイルに関する語用論的研究. 家族心理学研究* 第17巻第1号.
 - Horney K. 1942 *SELF-ANALYSIS* W.W. Norton & Company Inc., New York.
 - 霜田静志・國分康孝訳 1961 *ホーナイ全集* 第4巻 自己分析 誠信書房.
 - 神尾昭雄 1992 *情報のなわ張り理論—言語の機能的分析—*大修館書店.
 - 片野智治・國分康孝 1999 *構成的グループエンカウンターにおける抵抗の検討—抵抗の種類と属性との関係* *カウンセリング研究* 第32巻第1号.
 - Kohut, H. 1984 *HOW DOES ANALYSIS CURE?* The University of Chicago Press. (本城秀次・笠原嘉 (監訳) 1995 *自己の治癒* みすず書房)
 - Laplanche, J., & Pontalis, J.-B. 1976 *Vocabulaire de la psychanalyse.* 5 e ed. Presses universitaires de France. (村上仁監訳 1977 *精神分析事典* みすず書房)
 - メイナード・泉子 1993 *日英語対照研究シリーズ 会話分析* くろしお出版.
 - 三谷聖也 2005 *悪循環を切断するための新たなアプローチ—「相互作用に言及すること」の有効性に関する実証的研究—* *家族心理学研究* 第19巻第2号.
 - 三谷聖也 2009 *心理療法における抵抗の死と再生—「アイデンティファイドレジスタンス」の提案と可能性.* 東北大学大学院教育学研究科 臨床心理相談室紀要第7巻.
 - 森岡正芳 2005 *うつし臨床の詩学* みすず書房.
 - 中島志保・佐藤明子・生田倫子・佐藤宏平・長谷川啓三 2001 *機能的側面から見たマネージメントコミュニケーションの分類の試み.* *家族心理学会* 第18回大会抄録集.
 - 奥野雅子 2005 *メッセージ内容と文末表現の説得効果への影響力—臨床場面の比較から—* *日本家族心理学会* 第22回大会発表論文集.
 - 奥野雅子 2009 *合意形成プロセスにおけるコミュニケーションに関する臨床心理学的研究* 東北大学大学院教育学研究科博士課程学位論文 未公開.
 - Reich, W. 1933 *Character Analysis, trans. T Wolfe.* Rangley, Maine: Orgone Institute Press, 1945 (小此木啓吾訳 1966 *性格分析.* 岩崎学術出版社)
 - Rogers, C. 1966 *カウンセリング* ロジャース全集 2 岩崎学術出版社.
 - Strolow, R., Brandchaft, B., Atwood, G.E. 1987 *Psychoanalytic Treatment An Intersubjective Approach.* The Analytic Press. (丸田俊彦訳 1995 *間主観的アプローチ コフォートの自己心理学を超えて* 岩崎学術出版社)
 - 菅原佳世 2004 *問題場面におけるシステムの自己制御性—* *問投詞と沈黙に着目して—* *家族心理学研究* 18.
 - 若島孔文 2000 *葛藤的場面における回避的コミュニケーションの生起のメカニズムに関する研究—* *ディスクオリフィケーションが生起する状況の解明に向けて—* 東北大学大学院教育学研究科博士課程学位論 未公開.
 - 鷲岳覚 2008 *カウンセリング心理学事典.* 誠心書房.
 - Watzlawick, P., Bavelas, J.B., Jackson, D.D. 1967 *Pragmatics of Human Communication: A Study of Interactional Patterns, Pathologies, and Paradoxes.* W.W. Norton. (山本和郎監訳・尾川丈一訳 1998 *人間コミュニケーションの語用論 相互作用パターン, 病理とパラドックスの研究* 二瓶社)